

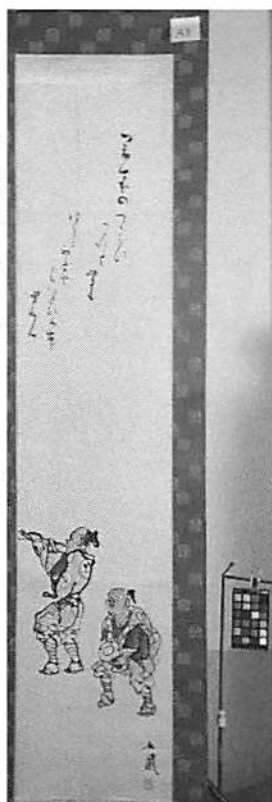
春足と江戸文化人との接点（春足文書コレクションの中から 資料紹介）

佐藤 武

はじめに

『江戸風雅』第三十号では徳田武氏により「遠藤家文書」の中、「一、秦鼎の『桶狭弔古碑』」「二、広海狂歌 われながら」「三、本居大平和歌 御簾にふく」「四、六樹園狂歌 いかでわれ」「五、唐麿狂歌 きぬぎぬは」「六、馬琴狂歌 山ざとも」「七、六樹園狂歌 きぬふまで」「八、『白癡物語』広告」「九、菊池五山『白癡物語』序」「十、六々園纂集『宇治能須左備』原稿募集」について解説・解説をしていた。また同誌三十一号では筆者が「遠藤家文書」にみる石川雅望と遠藤春足」と題し、師弟関係にあった二人の交流を示すいくつかの文書について解説・解説をご紹介した。今回はこの二回の紹介文で紹介し切れなかった文書の中から筆者が特に興味をそそられたものをいくつか取り上げ解説・解説をしようと思う。前回でもお断りした通り、解説・解説については筆者の能力を超えたものが多々あり、全く見当違いのものも多いと思われる。誠に申し訳がましいが各資料には元となる資料の画像番号を付してあるので疑問に思った方、更に詳しく御覧になりたい方はホームページ「狂歌文書館」の該当ページを御覧頂きたい。（なお11の番号は取り上げた人物、①の番号は資料番号、②の番号は補足資料の番号を示している。）

1 大田蜀山人（四方赤良 大田南畝 杏花園）



①蜀山人 狂歌 軸 (20231210-A3)

萬歳のつゞみに／つれて鶯も／ほうと初音や／うちいだすらむ

蜀山人

【語注】

*萬歳 三河萬歳。

*（河村）文鳳（かわむらぶんほう）安永8年（1779）—文政4年（1821）は江戸時代後期の岸派の絵師。名は亀。字を駿声、俊声、五游。号に馬声、有毛、首陽館、竹裏館、白竜堂など。山城国出身。優れた人物画や山水画で知られた（wiki）

【気づき】「ほう」に鶯の鳴き声と鼓打ちの「ほう」という発声がかけられている。遠藤家では昔から正月にこの軸を床の間に掛けていたそうである。

②蜀山人 狂歌 書き物 (手鑑2-10-1)

てる月の／かゝミをぬいて／樽まくら／雪もこんこん／花もさけさけ

蜀山人

【語注】

*樽まくら 酒樽をまくらとすること(日本国語大辞典 以下「日本国大」と表記)

【気づき】

満月は鏡に例えられる。鏡とくれば酒飲みには月よりも鏡開き(「鏡を抜く」という)。雪もこんこん降れ、花も咲け咲け。(酒のコンコンと酒々を掛ける)酒じや酒じや酒持つて来い。酒豪の蜀山人らしい一首。

③蜀山 狂歌 短冊 (手鑑4-6-2)

功ならず身もまたいまたりそかす／なはかりとけて何のやくなし

蜀山

【語注】

*なはかりとけて 名ばかり遂げて 名声だけ得て。
*やくなし かいがない。無駄である。(日本国大)

④蜀山 狂歌 短冊 (手鑑1-63-1)

きのふこそすてゝんてんとはやせしか／へんへん草となりにけるかな

蜀山

*きのふこそ 「昨日こそ早苗取りしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く 古今和歌集(172)

*しか 過去の助動詞「き」の已然形。逆接用法。

*へんへん草 ぺんぺん草 別名三味線草。

【気づき】

「すてゝんてん」「はやす」「へんへん草」三味線の縁語。

⑤蜀山 狂歌 短冊 (手鑑4-4-2)

早とめの脛のくろきに仙人も／つうをうしなふ気づかひハなし

蜀山

*くろきに 黒いのが原因で。

*仙人 久米仙人。伝説上の人物。大和の国、吉野郡の龍門寺にこもって空中飛行の術を学ぶが、吉野川の岸辺で洗濯している若い女の白い脛に見ほれ、神通力を失って墜落、その女を妻として俗界に帰る。(後略)(コトバンク)

【気づき】 早乙女の脛は日焼けして黒いので、久米の仙人も墜落する気遣いはないと茶化す。

⑥蜀山 狂歌 短冊 (手鑑4-13-1)

命あり足あり目あり口ありて／はなを見酒をのむそうれしき

蜀山

【気づき】

「はな」に「鼻」と「花」を掛ける。

⑦蜀山人 狂歌 書き物 (20230909-J33) 屏風貼り混ぜ (A75-K3-08836)

竹の子の／そのたけのこの／たけのこの／子の子の／末も／しける／めてたさ

蜀山人

⑧杏花園 七言絶句 軸 (20231009-K22)

伐性双蛾眉作斧

腐腸奇葉麴盈車

舍斯二者求何者

唯有床頭數卷書

杏花園書 花?堂時成筆

【語注】

*伐性之斧 (ばつせいのおの) 人の本性を損なうおのの意味。女色やみだらな音楽におぼれること。(大字源)

*双蛾 美人の両の眉。美人。(同)

*腐腸奇葉 (腐腸之葉) 腐った腸を治療する薬。うまい食物や酒をいう。(同)

*麴車 (きくしゃ) こうじを積んだ車。(道逢麴車口流涎 杜甫)

*舍 おく やめる すてる さる のぞく (大字源)

*時成 風柳山人時成 (ふうりゅうさんじん) ときなり、生没年不詳) とは、江戸時代の浮世絵師。来歴 出自・経歴は一切不明。ニ

ユーオータニ美術館所蔵の肉筆美人画「遊女図」(絹本着色)に

「風柳山人時成寫意」という落款があり、この絵の作者として知ら

れるのみである。「遊女図」は文化ごろの作とされ、絵の上部に

「いつわりの なき世なりせは 物前の 客の言のは うれしから

まし」という蜀山人の狂歌が記されている。画風は喜多川歌麿風で、

その当時流行の歌麿に影響された人物のひとりだったと見られる。

(wiki) (今のところ該当しそうな記事はこれだけ)

【訓読】

伐性の双蛾 眉は斧と作る／腐腸の奇葉 麴は車に盈つ／斯の二者

を捨てて何者をか求めん／唯だ床頭 数巻の書有るのみ

【現代語訳】

美しい二つの蛾眉は時には斧(凶器)ともなり／うまい酒食となる麴は車に満ちて私を誘惑する／此の二つ(美人と美食)を捨てて何を求めようぞ／ただ残るのは枕辺にある数巻の書物だけだ。

【気づき】

美人と美食。この二つはとかく人の本性を狂わす危険なもの。「世の中は酒と女が敵なりどうぞ敵にめぐり逢いたい」という心境か。

⑨蜀山人 七言絶句 書き物 (3023073-117)

思案橋末一郭中

大門景色已為空

更無遊女五丁町

唯有米春千石通

大門通懷古

蜀山人 蜀山人印 南畝印

【語注】

*思案橋 「日本橋小網町。現在の首都高速江戸橋JCTの近くには、江戸時代、思案橋がありました。思案橋の近くには浅草移転前の吉

原遊郭(元吉原)があり、その橋の上に立つて、吉原へ行くかそ

れとも二丁目の芝居に行こうかと思案したので思案橋の名がつけら

れたと言われています。(古今東西舎)

*大門 吉原の入り口にあった門。

*五丁町 吉原遊郭は江戸町一・二丁目、京町一・二丁目・角町の

五町からなっているとところから吉原の呼び名となった。「この五丁

町へ足を踏ん込む野郎めら」(助六由縁江戸桜)

*千石通 日本橋近くに千石通と呼ばれる通りがあったか?未確認。

それとも元吉原の大門の通りは今は千石の米が行き交う通りとなつたの意か？

【訓読】

思案橋末 一郭の中／大門の景色 已に空と為る／更に遊女 五丁町は無く／唯だ米春 千石通有るのみ（米春・千石は米の縁語）

【現代語訳】

思案橋のたもと （元）吉原遊郭の中／大門の風景もいまはただ空しい／更にまた 遊女が行き交った五丁町も今は無く／有るのは米つき職人と千石通りだけ

【気づき】

「大門通懷古」とあるので元吉原五丁町の大通りを懷古した七言絶句の狂詩。

（以下⑩まで徳田武氏のご教示による）

⑩蜀山人 七言絶句 書き物 （20230723-115）

暫々三升柿素袍

颯開切幕舞台罽

紛々張子首如兩

一拔市川大太刀

蜀山人

蜀山印

南畝印

【語注】

*狂詩の七言絶句。

*韻字 袍・罽・刀（下平声四豪）。

*暫 歌舞伎十八番の一。皇位へ即こうと目論む悪党の清原武衡が、自らに反対する加茂次郎義綱ら多人数の善良なる男女を捕らえる。

清原武衡が成田五郎ら家来に命じて、加茂次郎義綱らを打ち首にしようとするとき、鎌倉権五郎景政が「暫く」の一声で、さっそうと現れて助ける。その掛け声である。

*三升 市川団十郎の紋所。

*柿素袍 団十郎の装束。柿色の素袍である。

*紛々 張子の首を多く斬る様。

*大太刀 この芝居に於ては団十郎の大太刀姿がクライマックスである。

【訓読】

暫（しばらく）暫く 三升（みます）の 柿素袍（かきすおう）／颯（さつ）として切幕（きりまく）を開けば 舞臺罽（ぶたいこう）たり／紛々（ふんふん）たり 張子（はりこ）の 首（こうべ）は雨の如し／一たび抜く 市川の大太刀（おおだち）を

【現代語訳】

「暫く、暫く」と三升の紋所の柿色の素袍で現れ、／さあーっと切幕を開けば、その舞台姿に客席が罽々と騒ぐ。／敵役の張子の首を雨のように切り落とす。／一たび市川団十郎が大太刀を抜いて。

⑪蜀山人 七言絶句 軸 （20231210-111, 20230723-111）

忠義只傳国姓爺

終看韃靼奪中華

清風一自掃頭上

四百余州罽粟花

蜀山人

南畝印

【訓読】

忠義 只だ国姓爺を傳ふるのみ／終に看る 韃靼 中華を奪ふを／

清風 一たび頭上を掃ひてより／四百餘州 罌粟の花

【現代語訳】

忠義な人物は、ただ国姓爺だけが伝わっているだけだ。／その結果、韃靼が中華を奪うことになった。／清（しん、清国の意を掛ける）の風が華人の頭上の毛髪を掃ってからは、／中華全土の民が罌粟の花のような辮髪になった。

【気づき】

清国をからかった作かと思えます。

⑫蜀山人 掲額 (20231217調査 A69_K3_08812)

雲太楼 蜀山人

【気づき】

「雲太郎」は春足が初期に名乗った狂名であるが、「雲多楼」と書き、「雲太郎」と書いたものは見かけない。せつかく書いてもらったが間違ったか。

【補足資料】春足が雅望を通じて積極的に蜀山人の著作や書き物を求めていた形跡

①春足宛て雅望書簡 (手鑑1-31-1)

蜀山人著述さしあたり近所二無之あとより可奉呈候

②春足宛て雅望書簡 (手鑑2-1-3)

蜀山人ふしをり候まゝ／したゝめ物出来不申／かげま／画帖／右寝ながら無理に／したゝめさせ候唐紙を／来月と申事にて候
(この書簡尚々書に「鵬斎書」についても言及。)

③春足宛て雅望・南畝書簡 (手鑑2-3-2, 手鑑2-3-3)

(春足が雅望に阿波名産五色素麺を送った。雅望はそれを南畝にも

おすそわけしたと見える) (五老書簡 2-3-2)

扱は五色素麺／遠方之所御授被下／御厚意奉謝候実ニ／珍物にて江戸にてハ初而／見候事にてみなみな／目をおとろかし南畝／へも使にて届け候殊の外／よろこひ候由にてくれくれ／家内一同御礼よくよく／申上候事にて候 (四月廿日)

(南畝礼状 (2-3-3))

阿州雲太郎子より／五色麺一箱御授恵／被下忝御儀ニ御座候／御礼頼上申入候／取込早々

卯月十九日 蜀山人／ 六樹園主人 (四月十九日)

(五老書簡 手鑑2-4-2)

「(素麺頂戴がダブっている) 南畝もくれくれ御礼申候事にて候。扱梅のひゝき本十月趣町師楼にて興行天気よく存外ニ群集大あたりにて候ひき右披露(??) まで点(?) 数をかそへ番付ニしたて候までさてさてむつかしき事共にて・・・」 (五月十五日)

【気づき】四月廿日付け書簡と五月十五日付け書簡は内容にダブったところがある。重ねて礼を言ったものか?

④春足宛て雅望書簡 (手鑑2-2-2)

蜀山人墨跡到着仕由安堵仕候

(つづき 其後万代集一部八丁堀なる阿波やへ差出し候此節相届候や とある。「阿波や」とは本八丁堀三丁目にあった春足の江戸店。霊岸島の雅望宅とは目と鼻の先の距離にあった。この店を通じて春足、雅望は書簡・荷物等のやりとりをしていたものと見える。)

⑤春足宛て雅望書簡 (手鑑2-2-1)

此度南畝へ御とゞけ物早速遣候よくよく御礼申候やう二との事也短

冊帑共とみニ認させ候まゝ返上仕候

⑥ 春足宛て雅望書簡 (手鑑2-23-2)

南畝へ御たのみの品早々持参認させ申候御礼よくよく申通候様に被申候金百疋帑代被遣これも慥ニ受取申候屏風ハ四季の狂詩狂哥にて候その思召にて順次御さため可被成候

⑦ 春足宛て雅望書簡 (手鑑2-25-1)

南畝屏風着仕候由悦入候

⑧ 春足宛て雅望書簡 (手鑑2-26-3)

兼而被仰聞候南畝著作の品書肆へ申つけ置候所段々延引此節持参仕候間先御届申上候此外ニ狂詩之本一二冊有之候へ共此節本店にてすり不申よしにて手に入不申追々見かけ候ハ引取可奉呈候

⑨ 春足宛て雅望書簡 (手鑑2-5-1)

前便ニ南畝著述之書／八丁堀まで御届申上候着仕／候や承りたく候此ほかニも／あらぬ小説本可有之候へ共／書肆ニ一向たえて無之候／此度寝惚集とりよせ／置候を御届申上候これも／南畝わかき時之作にて候／追々ふる本ニても見あたり／候ハ／とのへ置奉呈へく候

【補足の補足資料】

⑩ 徳島県小松島市金磯弁財天境内蜀山人狂歌碑

分厘の雲さへ晴れてそろばんの玉の三五か十五夜の月

一村の奥女中かと見るまでに木毎に花のわた帽子雪 蜀山人

【気づき】

徳島の郷土史家・泉康弘氏は、その著書『藍の豪商』（平成三年徳島出版）の中で、「宿屋が阿波に来て、阿波狂歌壇の指導をし、

遠藤家を足場に鳴門・桜間池・大麻比古神社・矢上の大楠・木津上の角力・小松島の千代松原・海部の八坂八浜を巡歴した記録が軸物とされて残されていることから小松島の狂歌碑と関連して、大田南畝も阿波に来て、金磯の多田家、遠藤家などに宿泊したのではないかと藤井喬氏は推測されている」と述べておられる。この文章では藤井喬氏の説がどこから始まっているのか分かりにくい、いずれにしるこの説は首肯しがたい。（その根拠は長くなるので省略）筆者の見た限り、現時点において、雅望も蜀山人も阿波に来た形跡はない。

2、鹿都部真顔

① 狂歌堂 戯文 書き

物 (20230909-199)

寿

猿を歎きて竜宮に迎しも
／鶴を伴ひて仏壇にい
（？）る／豈浦島子をう
らやまんや／偏に無量寿
をこひねかふ

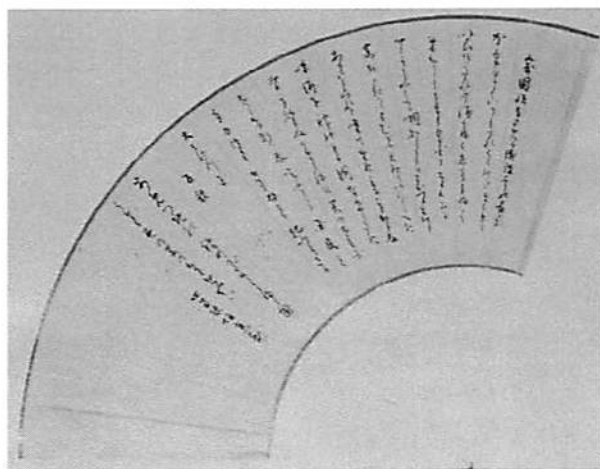
戯にうくすつの国字

を韻とす 狂歌堂

（「戊子七十五翁」という

落款あり。）

② 真顔 狂歌 色紙



(手鑑2-16-2)

春曉

初いめにたから船／ゆ(?)くふなうたはさめ／てもうたふあかつきのとり

真顔

③真顔 狂歌 短冊

(20230909記事内J112)

夕蛙

ころ／と蛙声して夕川を／渡る脚結のすゝろ???

真顔

④真顔 狂歌 短冊

(手鑑4-13-2)

対雪酌酒

さかつきを持手もそゝろふるはれて／こほしかけたる雪そたのしき

真顔

⑤真顔 狂歌 短冊

(手鑑4-10-3)

春雨潤花

児桜ひたらす露もあたゝかに／はなの湯おもの春雨そ降

真顔

⑥真顔 狂歌 短冊

(手鑑4-7-1)

祈不(?)逢恋

蓬萊ハなこはかりの納太刀／かけても神にさやはいのりて

真顔

⑦真顔 狂歌 短冊

(手鑑1-64-3)

よろこひきこゆとて

くりかへしあはれと思ふ素麺の／情の色はいふにいはれず

真顔

⑧真顔 狂歌 短冊

(手鑑4-5-2)

若き女とも／春の野に出て／遊ぶ所

腰帯の紫野ゆき標野ゆき／しめてもこゝろゆるむ春の日

真顔

【語注】

*あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

額王女 万葉集卷1-20

⑨真顔 狂歌 短冊 (手鑑1-63-1)

月前梅

うめかゝにむかしをとへハかた枝より／さし出かほなる春の夜の月

真顔

⑩真顔 狂歌 錦絵 (手鑑1-35-2)

(職人尽／千春画／五色之内)

黄

俳諧歌場 真顔

青柳もきハむはかりに／にほふなり／酒漉袋えたに／ほす日は

⑪四方歌垣真顔 長歌と反歌 扇面 (手鑑2-17-2)

寄国祝をよめる俳諧ふりの長歌

かけまくハかしこけれとものたまきは／いひにくけれと酒うまく魚

鳥うまく／米すらもうまし皇国とことくに／聞うらやミて咽なら

しさひつるえみし／歯をときてはむかふえみしいにしへに／ありハ

しつれと唄てたに／みることならぬ／味酒を神のもる国なめてたに／

みることならぬうましねを君のをす国／をしけなく吞食ふからに国

民も／手力つよくきもふとく肥ふとりたる／大ミけつ国

反歌

あめつちの神のかためしうまし国／うまく夷の歯のたゝめやハ

【気づき】

大田蜀山人が寛政の改革を予期して狂歌界から一步身を引いたのは天明七年（1787）ころ。その後を受け継いだのはいわゆる「狂歌四天王」と呼ばれる人達。（宿屋飯盛、鹿都部真顔、頭光、馬場金埒）中でも、宿屋飯盛と鹿都部真顔は全国の狂歌界を二分した大物である。内容は「ことくに（異国）」「えみし（夷）」に対する偏見が含まれている愛国的日本賛歌。万葉風の長歌と反歌から成っている。

⑫春足宛て真顔書簡

（手鑑1-22）

当六月十一日之貴翰同下旬／落掌委敷拝誦仕候先以此節／不順之氣候ニ候得共愈御佳適／御入被成候条奉萬福候扱は去冬中は／貴作之物語拝借被仰付難手放日夜／数篇拝見仕／而楽ミ相打在候中不計／媚ニ而候柳高岐と申者霜月中旬方／冷症之傷寒ニ而不得止事老拙彼宅え／罷越昼夜看病仕居寒尽候而も春ニ／成候事を不覚心配之向ニ日を過し候所終ニ／療用無施（？）二月廿八日下無仕

（????）其後は又々／追福仏事方家督相続等ニ而日々／

面？議ニ心を苦々候故ニや老拙旧疾を免／動氣甚誦日々平臥薬用を役と仕候外ハ万事放下仕何事も打忘レ？ニ而健忘と？／申様ニ相成申年六月方当月ニ至ル迄月並も／休会仕諸国之文通も如（？）能越打絶罷在（？）候／是等之仕合ニ而再度之御文通ニ返書も不呈／失敬之段偏ニ御宥恕可被下候右之病中ニも／御頼之笑林広記之儀ハ折々存（？）出し書林え／催促ニ及候へとも近來右之書一向払底ニ而／尋兼候由申中浅草和泉屋庄次郎と（方？）書林方々／此一本參候間

早速可呈存居是又例之懈怠（？）之／本性ニ而日々及延引恐入候

唯今ニ至而彼是申候而ハ／申訳か間舖御承知も御座有間舖存候得共去冬／以来右件之病人と申老拙家督之懸り媚を／失ひ候愁傷ニ而世間之義理も約束も打なぐりに／相成候事ニ而御遠察可被下候近來漸袖も乾キ候／段ニ而呈返書候御腹立を和メ被下御面倒なから／一通り御よミ訳（？）可被下候／扱此笑林広記ハ元來御聞及之北山先生所持之／本ニ而孝経楼藏書之印も有之菊崖と申人も／近來文人中ニ名をしられ候藏書家にて候？／孰レ好本ニ而飽（廉？）落丁なと無之全本とミヘ間（？）／浪華方御買入之本ニ而御見くらへ買上被下候（宜思召被下候？御求メ置／？永くいはゆる六日の菖蒲にハ候へとも等閑ニ捨置ぬと／申品を御覽ニ入れ？此度相？セ／寛永二月旦評是ハ珍物多謝仕候拝受仕候而永ク／文庫中ニ納メ可申候／ケ計之手紙を認候ても眩暈起手震ひ候而くるしく／候まゝ書さし申候御免可被下候／返々しれもの物語本書拾遺とも一字の損？なく？／と？早く御出板奉待候

六々園雅君

真顔

【語注】

*笑林広記 清代の『笑林広記』（著者は「游戲主人」と名乗るがその伝記は不明）が近世における集大成であり、以後のものは以前の作品の焼き直しばかりとなり、衰退していくことになる。（wiki）

春足はこういう笑話に関心があつたようだ。

*菊崖 岡部菊崖 大窪詩仏と共著あり。

*役と もつばら（旺古）

*鹿津部真顔 1763（宝暦三年）—1829（文政十二年）江戸時代後期

の狂歌師。戯作者。鹿都部真顔とも書く。号に紀真顔・狂歌堂・鹿杖山人・俳諧歌場・万葉亭・四方歌垣・四方真顔など。『282』(天明二年) 狂歌界に入り、師は元木綱で『283』(天明四年) 大田南畝門下となり算木有政・錢屋金埒・らと「スキヤ連」を結成した。やがて、宿屋飯盛・頭光・金埒らと狂歌四天王と称された。『284』(寛政六年) 南畝から「四方姓」を譲られ、飯盛と化政期の狂歌界を二分した。真顔は天明狂歌が奔放無軌道に陥ったことを是正しようと、鎌倉・室町期の狂歌を本来の狂歌であるとする「俳諧歌」を提唱したが、一般からは親しまれず、結果として狂歌の衰退をもたらした。

(wiki)

【大意】

- ① 六月十一日出の貴信六月下旬拝読。
- ② 去年冬中、貴作『白癡物語』をさすか? を拝借するよう仰せ付けられ拝読。(おもしろいので) 手放し難く、数編拝読した。
- ③ ところが測らずも婿(娘の夫) 柳高岐という者が去年十一月中旬から「冷症之傷寒」(何の病気か?) (寝込み) やむなく自分が婿の家に行き、昼夜看病することになった。
- ④ 春が来たことも気づかず心配しながら看病が続けたが遂に二月二十八日(他界した)
- ⑤ その後、葬式、家督相続等で日々苦しんでいるうち、
- ⑥ 持病が起こり、動悸が甚だしく寝込み、薬を飲む以外は何もかも放り出し、健忘症同然となった。
- ⑦ (去年) 六月より当月(六月) に至るまで月並み(狂歌会) も休会となり、諸国との文通も絶えた。

⑧ このような次第であなたからの二度に渡るお手紙にも返事を差し上げず大変失礼したことをお許し頂きたい。

⑨ このような病中でもあなたから頼まれた『笑林広記』(春足が『白癡物語』を創作する折、参考とした中国の笑話集) のことは折々思い出し、書店へ催促したが、此の書は近頃完全に払底しどこにも見つからないとのこと。

⑩ そのうち浅草の和泉屋庄次郎という書店からこの本が手に入ったという連絡があり届けてくれたので早速お送りしようと思っていたが、例の懈怠の本性(なまけぐせ) が出て今頃になってしまった。

⑪ 今頃になってあれこれ言うのは申し訳がましくご承引下さらないかもしれないが先に述べたような事情で世間の義理も約束も投げ捨てている有様、近頃に至りようやく立ち直り御返事を差し上げる次第、どうか御立腹を和らげ、この手紙を最後まで読んで頂きたい。

⑫ さてこの『笑林広記』はあなたもお聞き及びの通り北山先生が所持していたもので「孝経楼蔵書」印があり(孝経楼は山本北山の号と思われる) また「菊崖」という印もある。この菊崖もよく知られた蔵書家である。いずれにしても好本で飽く落丁などない善本である。(別の解釈 真顔が送ってきたのは二冊で別々の蔵書印があったか?)

⑬ 「浪花方御買上之本」(春足が真顔にこの本の購入を依頼したにも関わらず送って来ないので大坂の本屋から買い入れたものか?) と見比べ、「六日の菖蒲」(時期を失したもののたとえ) ではあるが御購入頂きたい。

⑭ 「寛永二月旦評」(寛永二年に出された月旦評(人物や物事に対

し評価を行うこと) (春足から送られたもの) は珍物で長く書架に蔵したい。

⑮このような手紙を認めてもめまいがする。

⑯『しれもの物語』(本編) 及び『同拾遺』(落ち穂拾い) 早く出版されることを期待する。

【補足】(『六々園漫録』) 春足が真顔にも出入りしていたことを示す文章

狂歌堂の三笑

おのれことし戊子の春江戸にもをしけるととき狂歌／堂をとふらひて何くれと物かたりどもしけるに／主人翁のいふやう世に俳諧師ばかり拙きものは／侍らぬなりかの尾張の士朗陸奥の乙二などいへる／さしも此道に名高き人々のかきたるものを見る／にもただ笑ふにたへぬことのミ多く候なりはやう／久老がものしらぬ俳諧師とかきたるもげにことわり／におほえ候といふにそのれもまことにさにて候／なりたゝし俳諧師につきてものしらぬものハ／狂哥師にこそ候らめといへば翁もまたかしら／がきをしてさなりさなりとて笑ひぬ此時清水浜臣も／きてありけるが此物かたりをきゝてこハ阿波のまら／うどのよくいはれたり尚いはば其狂哥師につぎても／のしらぬものハ和歌よミこそ候らめといひける／にぞ翁もおのれもふたゝびげにげにといひてもろ／こゑにぞ笑ひあへりける

【語注】

*戊子 文政十一年 (1828)

3、本居宣長



①本居宣長像 (20231210-A17-1)

師木嶋のやまと／こゝろを人とは／朝日ににほふやま／さくらはな

宣長

②本居宣長像 (20231210-A19)

師木嶋の倭こゝろを人とハ婆／あさひに／ほふやま桜花

こハおのかゝたを村田井樹か／写させたるおり哥かきてと／こふまゝに書てあたふ

宣長

【語注】

*村田井樹 村田春門 (むらたはるかど) (1765~1836) 江戸時代後期に活躍した国学者・歌人である。本姓は宮崎、号は田鶴舎、幼名は井樹。(WIKI)

【補注】上記宣長像が遠藤家所蔵になったいきさつを示す資料

①六々園宛て瀬部春根書簡 (手鑑2-11) 宣長像預かりについて

て

扱当春京都方御懸合及候故大人之像子細ありて当年中御預置被下候様願置候趣最早兩三年こなたの拙か手元??申受ん事??奉存候付而は此度御譲り申上度奉存候はやくきこえ上候一義ニ付万一入用之節ハ御??にて事足り候様仕度奉存候間さやう思召可被下候

② 瀬部春根宛て大平書簡 (手鑑2-11-3)

故大人像ハ上々物也是ヘ大平か書そヘ認ナトヲスルハ却而をしき事也此まゝ上々ノ珍重物也

文政十三年 大平

十月十八日

瀬部春根雅兄

③ 本居宣長像譲渡に関する春足のメモ (手鑑2-11-3)

寅 十二月 あつかり

辰九月 ユツリ受申候

大 (右?) 翁御像 一軸 春足

④ 春根書簡 (遠藤家2フォルダー P2101763)

一故翁像懸物の事御賢慮仰聞られ是又御仁恵の至りいかてあしく承り候はんうれしき御事ニ奉存候乍去拙号旭桜翁のゆゑよしも御国ニ達シ一軸の始末も??いたし候事にて何とも只今身を離ち切候事相成かたき連ニ御座(??)候乍去留守中の趣義も思ひやられ人しらぬ心痛仕候場合ニ候付てハ被仰下候趣の御心にて一円金愚妻御恵借被成下拙生帰国の有無ニかゝらず当年限ニ御預置被下候義相調申ましくや当年師走限ニ金子返納調かね候時ハ最早御付届ケニ相及不申候間御勝手ニ任せ御蔵物ニ被成可被下候

【語注】

*春根 瀬部春根 春曉とも。生没年不詳。阿波徳島塀裏の人。春足よりやや年下と思われ、本居大平・石川雅望に師事。春足と同時に、阿波狂歌壇の中心人物として活躍。狂歌では『阿淡狂歌百人一首』の編著がある。藤井喬「花垣一衛は瀬部春根の後身か」(『ふるさと阿波』(阿波郷土会報 1987))という論考がある。

【気づき】

現在、遠藤家文書の中には二点の本居宣長像がある。①②がそれである。しかし、②は拓本と思われ、何かを書き入れる余白はないのでここでは除外し、①についてのみ考えることとする。この宣長像がどういいうきさつ・経路を経て遠藤家の所蔵になったのか。興味深い文書が①④である。

まず、①について、最後の花押が誰のものであるか長らく分からなかったが、つい最近徳島県立文書館の山口・関岡学芸員から当館所蔵の『阿淡狂歌百人一首』巻頭にあるこの狂歌集の編者で漢文の序を書いている瀬部春根(註参照)の花押と同一ではないかという情報を頂き、比較してみたところほぼ間違いなく、内容も辻褄が合うので春根書簡と判断した。引用部分を現代語訳すると次のようになる。「さて今年の春、(春足が)京都から「御懸合」(ご相談)なられた「故大人之像」は訳があつて今年中は(あなたのところに)お預かり下さるようお願いしております。「最早奉存候」(この部分解説・意味不明)つきましては、今回、(あなたに)お譲り申し上げたいと考えております。このことについてはもっと早く申し上げておかなければならなかったことですが、万が一、私方に必要な

場合、(一時的に) 貸していただくことをご了承願いたいのです」

②について、この文書は太平が瀬部春根(春曉)に宛てた書き物であることに注意する必要がある。内容は「故大人像は上々の物です。この軸に私(太平)が(何か保証めいた書き物)」などすることは、かえって(作品の価値を落としてしまう) よけいな行為です。どうかこのまま珍重物としてご所蔵下さい。」となる。内容から推測すると、故大人像の現在の所有者、瀬部春根がこの像が真物であることを保証する何か書き物(例 20231210-A18-2)を添えて欲しいと依頼したのに対して、太平は正しく本物であるからその上に何か書き添えるなどすることは却って価値を損ねるから何も書く必要はない。大事にしまっておけ」という返事である。春根宛ての太平書簡がなぜ遠藤家にあるかという理由については、後述するように春根が訳あつて春足にこの軸を譲るに際して保証書代わりに添えたと考えられる。

③について、これは故大人像の所有権移転に関する春足のメモと思われる。寅・文政十三年1830十二月に預かり。寅・天保三年1832正式に譲り受けた の意味と思われる。

④について。右①③が手鑑の同じ見開き(22)に貼られているのに対して、この書簡は無造作に段ボール箱の中に未整理状態で蔵されていたものである。その理由はこの書簡の冒頭でも述べられている通り春根の秘密にして欲しいという意思を尊重したものと思われる。内容については次の通りである。「故翁像懸物の事(右の故大人像)についてあなた(春足)がおっしゃられた趣(譲り受けたという申し入れをさすと思われる)、大変有難く拝読しました。」

しかし私(春根)の号「旭桜翁」の由来は、宣長翁の「敷島の和心を人間はば旭に匂ふ山桜花」に基づくものであり私にとつては記念すべき大切な逸品故、にわかに手放し難く思っております。とはいえ、留守中の妻の苦境を思いやるとそうも言つてはおられません。つきましてはあなたのお申し出をお受けし、一円金(一両を一円と呼ぶか?)を妻に貸してもらえないでしょうか。(返済については)私が帰国するかどうかに関わらず、当年十二月までお預かり頂くこととし、返済できない場合はあなた(春足)の所蔵として頂いて結構です。」というもの。つまり故翁像を春足に質入れし一円金を妻に融通してもらい、もし十二月までに返済出来ない場合は質流れ同様、春足の所蔵としてもらつて構わないというもの。

以上からこの像は、最初、春根が所蔵していたが、春根の困窮により、春足に「質入れ」し、後に「質流れ」同様の形で春足所蔵となったものと推定できる。ただし①の解明によつてこの順序は変更になることも考えられる。

③ (20231210-A18-1) 宣長和歌「岡月」

岡月

いつとしもわかぬ梢にさす影も月は秋なる岡のへの松 宣長

【補助資料】

① 「いつとしも」和歌の太平の書き物(鑑定書)(20231210-A18-2) 遠藤春足の子がわが翁のかかれたる岡月の歌見せてちかきころは鈴屋大人の筆の跡なりとてよからぬもののいつはりかけるが世におほくて人々の思ひうたがふをそのあかしになるべき一ことそへよといひおこせたるによく見さだめて

松枝のさしもしられてさすかげの／わかぬことなき岡のへの月

大平

【気づき 徳田武氏 ご教示分】

*「いつとしも」和歌現代語訳

何年たつたとも分らぬ古い梢に指す光も、秋の月のそれである岡の
辺りの松であることよ。

*「松枝の」和歌現代語訳

遠藤春足殿の子が、我が宣長翁の書かれた岡の月の歌を私に見せて
「近頃は鈴屋大人の筆跡である」と言って、宜しくない者が偽って
書いた書が世間に多く出まわっていて、人々が疑わしく思うので、
その正しさを証明することができ一言を添え書きせよ」と言い寄
越したので、私は良く真偽を見定めて、

松の枝がさすがに明らかに知られるほどに射す月光によって

見分けられない事が無い岡の辺りの月であることよ

④宣長和歌（手鑑4-2-1, 4-2-2）

待郭公

つれなさも初音のゝちハ時鳥まつに頼ミの有明の空

宣長

【補助資料】

①大平・鑑定の書き物及び和歌（手鑑4-2-2）

わか翁のかゝれたる待郭公の歌にあかしとなるへき一ことをと人の
こへるに

ほとゝきすとゝこほりなき筆のあととそれとこのミの有明の空

大平

【気づき】

③と同じく、大平の鑑定付き宣長の和歌の書き物である。「つれな
さも」の歌意は「素っ気ないホトトギスの初音を聞いた後、次の一
声がいつ聞けるかと待ちながら松の向こうに頼みをかける有明の空
だなあ」というもの。「ほとゝきす」の歌意は「ホトトギスの滞り
のない声のようにのびのびとした筆跡は、正しく宣長翁のあの見慣
れた好ましい有明の空のような筆跡である」というもの。ホトトギ
スの鳴き方の特徴にかけて、宣長の筆跡に間違いはないと保証した
内容になっている。

⑤宣長 今様歌（20230723調査-J1-J22フォルダー J5）

山家のこゝろを

宣長

世のうきことハのかれすむ／柴のあミ戸もさすか又嵐の／音の身に
しみて都こひ／しき山のおく

⑥宣長和歌 軸（20230723調査-J1-J22 フォルダー J4）

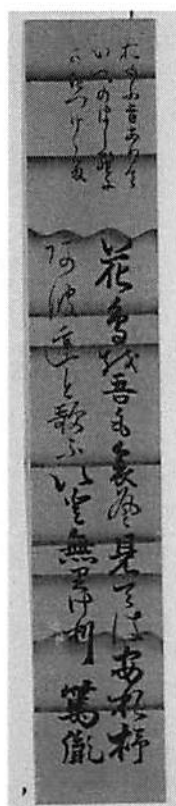
東照神命之／安國登志豆／米坐祁流御／世者萬代

宣長

【気づき】

東照の神の命の安国としづめましける御世は万代（とうしようのかみのみ
ことのやすくにとしづめましけるみよはよろづよ と読むか？）。東昭
大権現即ち徳川家康がお定めになった徳川政権の御代は万代まで栄
えるという賛歌。

4、平田篤胤



- ①「天の磐笛」について 春足 狂歌 短冊 (en200580-IMG_155)

平田篤胤の／もとにて天の／磐笛といふものを見て
君か名ハ国もとゝろに響くなり／あめの磐笛伊吹まゝにゝ
(????)

- ② 春足 狂歌 短冊 (30240107調査 B195)

はしめて平田大人を／とふらひまゐらせ／けるに天磐笛といふ／
ものを見せられ／ければ
きみか名は国もとゝろに響くなり／天の磐笛伊吹まゝにゝ

春足

＊天の磐笛 江戸末期の国学者・平田篤胤の「古史伝」には『故、その八重事代主神は天岩笛を製りて、皇美麻命に奉りて、祝ひ給ふ』とあり、「天岩笛は、磐もて製れる笛なり」「天岩笛と云う物の凡その形は、歌口のかた細く、末太く開きて横に穴はなく、謂ゆる螺角に似て、石なるものと知られたり」と記してある。篤胤の国学の道友・屋代弘賢は、ヤマトタケル命が東夷を平らげて帰る途中、上野国の古社に奉納したとの言い伝えのある岩笛を借りてきて篤胤に見せた。その岩笛は、楕円形の硬い石で、重さは約26kgほどもある。

り、法螺貝の様な大きなものだった。吹いてみると、音は高く響き、風格があつた。しかしどうみても人が作つたものようだったが、近い時代の物には見えなかつたので、ヤマトタケル命の時代のものであることを思わせる岩笛だったと記しています。〔天の磐笛こぼれ話〕三より)

＊伊吹 「気吹舎(いぶきのや)は、江戸時代の国学者平田篤胤(ひらたあつたね)が営んだ書斎兼私塾。文化元年(1804年)創設。篤胤、鉄胤(かねたね)、延胤(のぶたね)の平田三代にわたる国学塾で、明治時代(1876年)までつづいた。当初は江戸の湯島天満宮男坂下(現、東京都文京区湯島)で営まれていたが、鉄胤が久保田藩(秋田藩)に取り立てられ、佐竹氏の家臣となつてからは鳥越(現、東京都台東区)の同藩中屋敷に移つた。平田篤胤が「気吹舎」の号を用い始めたのは文化13年(1816年)であり、それ以前は「真菅乃屋(ますげのや)」の号を用いていた。(wiki)「まゝにゝ」については不明。」

- ③篤胤 和歌 短冊(手鑑3-15-1)

むつき二日にまどの／まへにうくひすの／鳴けるに
我かいほ(等?)の春は今日こそ来にけらし／にはなる梅にほゝき
鳥なく

篤胤

- ④篤胤 和歌 短冊(手鑑3-15-2)

おもふ旨ありて／いへのはしらに／かきつけゝる
花鳥を吾も哀と見てはあれと／あはれと歌ふいと無りけり

篤胤

⑤春足宛て平田大角(代筆) 書簡(漫録一・二、緊急解説フォルダー P212181)

一筆啓上候秋暑強御座／候得共貴家御揃倍々御清栄／可被成御起居珍重奉存候然候は／

拙子講業相励ミ候古道学之儀ハ／其本基於尾州御家御由緒被為在候ニ付／右学業御取立之儀先達而願書／差出候所 御聴濟ニ相成既ニ先年／来御出入 御目見等被 仰付／罷在候然ル所本月十二日依御召状參／殿仕候所俸格式等結構被 仰付難有仕合奉存候未本願通被／申ニハ無之候得共追々御含ミ被在候／事ニ相聞候遂ニ本願可相達牀ニ／相向ヒ大慶至極奉存候条御同慶／可被下候猶後日御沙汰御次第二追々／可申入候先ハ右為御知如此御座候以上

平田大角／篤胤 花押

七月十六日

遠藤宇治右衛門様／人々御中

尚々書状数多ニ付代筆之段／御用捨可被下候

⑥同書簡包み紙と思われるもの(⑤と同筆) (エノ200667)

江戸ゆしま天神／男坂下小嶋祐助様御地面／平田大角

【補注】

＊篤胤の尾州徳川家出仕についての情報 「文政6年(1823年)、かねてより学問に専心したいとして備中松山藩主板倉氏に対し永の暇を求めていたが、それが聞き入れられ、松山藩を辞している。こののち、篤胤は尾張藩に接近し、一時、わずかな扶持をあたえられたこともあったが、晩年にはそれを召し上げられている。(WIKI) この情報から本書簡は文政六年以降と推定できる。

【補助資料】

①平田篤胤『霊真柱』について 春足宛て・本居大平書簡(手鑑「

41)

一御尋の霊真柱の事御申の通／いひ過したる説とも、多く候へ／とも中にハおもしろき説とも、なきにしもあらずいづれにも／皇国の学びをあふき伝し／鈴屋の功業を世に弘く道引／たてんとの著書なれハ其志／の性ハ甚称賛すへき事也／此霊の真柱の事諸方より／近ころ追々ニ尋に來り候事ニ御座候(八月五日付け)

②春足が平田篤胤の著述について問い合わせたとみられる書簡に対する五老返書(手鑑2-23-1)

此外平田某とか／申仁著述これハいまた／披見不致候江戸ニハよき／和学者ハ無之候

③春屋詠草(春足和歌集) 春足が篤胤を詠んだ歌 (en200579-PC1 21381)

平田翁のもとへせうそのついでにまうしつかハしける

君ならてたれか見るへきちはやふる／神代のまゝのふしのしらゆき

【語注】

＊『霊の真柱』(たまのみはしら) 平田篤胤著 文化十年1823刊行。古学の徒は大倭心(やまとこころ)を堅固にもつことが肝要であり、そのためには「霊(たま)の行方の安定(しずまり)」を知る必要があるとして、宇宙の開闢から天・地・泉の生成と形象を、10箇の図と古伝により説明し、その過程を貫いている神々の功業を明らかにして、霊魂の行方を論じた書。篤胤の幽冥観を確立し、国学的宇宙論に新たな展開をもたらした重要著作。(岩波文庫 青6412『霊の真柱』表紙より)

【気づき】

春足は平田篤胤にも強い関心を抱いていたようである。⑥の包み紙にある「江戸ゆしま天神男坂下 小嶋祐助様御地面」に住んでいたようなのでこの場所で会ったかも知れない。わざわざ訪ねて行き、篤胤の揮毫を求めたり、また書簡のやりとりもしていることからそれはうかがえる。『霊の真柱』について大平、雅望二人にも問い合わせをしている。二人の返事の内容が対照的なものも面白い。

5、(荷田) 東丸



①東丸? 和歌 短冊 (20231210-A39)

朝影にわかみはなりぬしら雲の／たえてきこえぬひとをこふとて

②東丸 和歌 短冊 (20231210-A39)

庭虫

東丸

【語注】

*荷田 春満(かだの あずままる、寛文9年1月3日ー元文元年7月2日(1796年)は、江戸時代中期の国学者・歌人。通称は羽倉斎宮(はくらいつき)。初名は信盛と称し、のちに東丸。賀茂真淵・本居宣長・平田篤胤と共に国学の四大人の一人とされる。(Wikipedia)

【補注】

この二首は同じ紙面に貼り付けてあるもの。「朝影に」は詠み人の名前がない。筆跡が似ているので次と同じく東丸と思われるが次に示す大平書簡(手鑑1-2-1)中の「契沖東丸短冊 一ちく」という文言に該当するならば「契沖」ともとれる。

【補助資料】①春足の鑑定依頼に対する大平の返書(手鑑1-2-1) 然らば先達而御遣しの品染筆物／

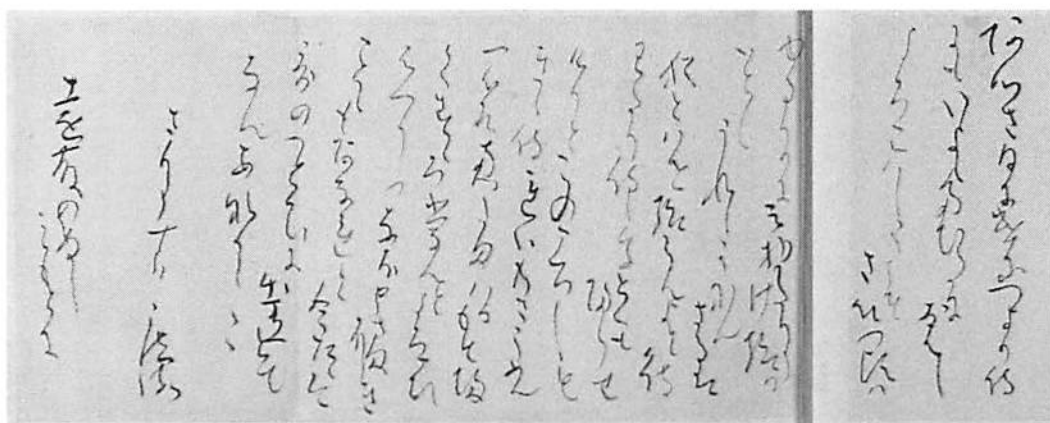
一岡の月 一ちく

一懷紙 夜霞 一枚

一短冊 郭公 一枚

一契沖東丸 短冊 一ちく

右之内真跡と見定め申候岡の月と／郭公の短冊へ此度そへうた詠懸／御遣しの奉書へかき認上申候余ハ見定／めかたく候故そのまゝ返上申候右不残／慥ニ御落手可被下候御きのとくなから／うたかはしき品をよろしくとも申／かたく候又契沖師東丸翁の短冊／右ハあまたも見受不申品故真偽／不存申候しかれとも大かたよろしき／品ニてあるへく存候



① 春足あて（大江）広海
書簡（手鑑1-5-2）

あつさ日にけにつよう侍に
もいよゝたひらかにおはし
よろこハしくこそ／さいつ
頃ハゆるりかにミ物かたり
うけ給りいとれしく
なん／さるは猶とハせ給ら
んよと待わたり侍しに
（？）とくも／帰らせけり
とこのころしもきゝ侍れハ
乃（？）さうめん一箱恵た
まハるもて帰てすゝろ？な
んとよろこひはへりつなほ
申さまほしきこともあなれ
と今たゝ今（？）／哥のつ
とひに出立とてなんあなか
しこ

さ月十日 広海

遠藤のぬし／ミもとに

② 大江鞠負（広海）書簡

（遠藤家2フォルダー P21

01830）

未解読

③ 広海 和歌 短冊（手鑑4-1-4）
藤袴

ふちはかまたちわかれにしおもかけのさらにわりなくかにゝほひつゝ

広海

④ 和歌短冊（手鑑4-12-3）
乞巧篋

二のまちはとりもよろハす柱をたてゝあつまひとつを机しろにて

広海

⑤ 広海 和歌 短冊（手鑑4-14-2）
千鳥

うらちとりむれてみたれてしつけきは／ひとりひとりか難（？）く
ねなるらむ

広海

⑥ 広海 和歌 短冊（手鑑4-20-1）

遊仙窟云る？終機女留星去といふをもて夕顔を
ゆふつゝはえくほばかりに影さしてひとりほゝゑむゆふかほの花

広海

⑦ 玩菊 源語にならふ 書き物（20230723-J14-1）

未解読（源氏物語 若紫の一部 書写か？）

⑧ 『東日記』序文（フォルダー4 P2020004）

あし曳の山ミちかけとも所ともにおきて／させられしよりひむかし
の国の海へた西国の／うらつたひすき／に？ら気もてゆきてぬて
／ゆらくはゆまちやちまたになむわかれ来／にけるしかはあれと鳥
かなくあつまち／の今のいきかひハかりミさかりにきまたるハ／あ

らさりけらし草枕たひのすさミのかき／にきともあまたあなるかな
か二紀朝臣の／はかりめてたきハあらぬにやあるハしほうミの／ほ
とり二てあされあへるあるは一文書を／たにしらぬものらかあしは
十もしにふみてそ／遊ぶなといひてなほところあされ／はみ
たる筆つかひのなかなかほひありて／千とせののちさへそのおも
かけみるこゝち／してすゝろかるくなりこゝに此日記はしも／山の
たゝすまひ水のなかれをしるき松はらの／けしき？へてたれも／
しるしつへうあめる／ことゝもはふき高い者？朝鳥のあさ／立い
つるあしもとゝろくかきろひの／ゆふさり屋とかうまやのたハわさ
まてけに？／いひのつまことしひの葉のしたゝりつゆ／もらさぬお
かしさかきりなしや我はた／所のかみ度々往かひなつかしまるれハ
かへさひ／よミ？さなり／／とうべなひたりき

文政十一年八月

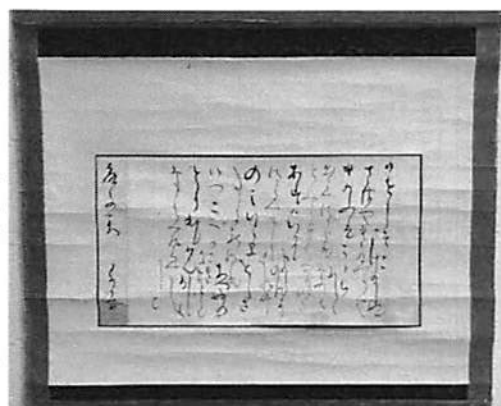
大江広海

【語注】

＊大江広海 (一七六九—一八三四) 徳川末期の国学者。明和六年
越後に生る。通称鞆負、のち健斎と呼び、字は景迹、樗園と号す。
江戸に住み、村田春海の門に学んで歌文をよくし、のち京に都講し
て一家をなした。天保五年没。年六十六。京都鳥部野に葬る」(『日
本人名大事典』1937 平凡社)

【気づき】残念ながら難読力所が多い。

7、加藤(橘) 千蔭



＊ゆふこり 霜や雪などが夕方になってこりかたまること。またそ
のもの。(旺古)

③千蔭 和歌 扇面 (フォルダー6 P30923989)

山かつの／かきほの／のさきし／より／夜な／／のかけ／そかほ
れる 千かけ

【補注】

同じ画像右に包み紙あり。「千蔭扇面画讃」と記す。

【気づき】

和歌らしきものが記されているが二句め、四句めの音数が合わない。
暫くながめていてふと気がついた。画に氣をつけて見ると「のさき
しより」の近くには梅、「夜な／／」上には、のようなのものが
十二ほどならべてある。そこで考えた。この歌は「山かつのかきほ

①和歌 短冊 (手鑑㊦二)

むさしのゝこかね／ゐのさく
らを見／にまかりて

啼わたる天のかはらかさく花の
／くもの中行水のひとすち

千蔭

②千蔭 和歌 扇面 (手鑑㊦㊦)

や二

水とにて／そこともわかず／ゆ
ふこりの／雪に色ある／峯

(岸?) の／こまつを 千蔭

の梅のさきしより 夜な／＼星のかけそかほれる」(歌意)「山に住む人の垣根の向こうに梅が咲いて以来、夜ごとに星の光までが香りを放っている」。夜の梅の花を星と見る発想は春足の狂歌「これも又年代記にやしるしなん星をふらする梅の下風」にも見られる。どうであろうか。

【気づき】この扇面について筆者と遠藤氏との間で次のような会話が交わされた。

筆者 「この歌は二句目、四句目が字足らずになっています。よく見ると画には右側に梅、上に、ののようなものが十二並べられています。そこでこの二つを取り込んで『山かつのかきほの梅のさきしより夜な／＼星のかけそかほれる』。遠藤氏答えて曰く「この、はよく見ると虫食いです。画を取り入れるならば左側に月と読める松茸のような絵がかいてあります。そこで『山かつのかきほの梅のさきしより夜な／＼月のかけそかほれる』と読んでみてはどうですか。』筆者『なるほど、は虫食いですね。遠藤さんの読みが正しいかもわかりませんね』

④ 千かけ?・書き物 軸 (20230723-J10)

御せうそうけ給りて／さはやきかへりつゝ(????)／きのふはこゝちあしく／???けふは／とみにさはやき?／あすはいかてま???／まるくしくれ竹／のミいとまをしき／事に罷侍れあやぬの／いつこへかおきまとハし?／とり出しけん少しも／筆そへ???／かしこ

???天

千かけ

⑤ 宛名・差出人不明。千蔭? 書簡(?) (手鑑「5-1」)

【気づき】

④⑤共にあまりにも流麗なる筆跡。解説出来ず。ご教示願いたい。

【補足1】人の書き物を贈り物とする例 雅望書簡(手鑑「5-1」)

扱なにそ御報のついでニ／奉呈度存候へ共存つき／無之候／

ちかけ 扇面

春海 短冊

これは沢山所持いたし候所／みな人に遣はしわつかに／これのミのこり有之候／しるしはかりニ奉呈上候(ちかけ扇面は手鑑「5-1」、村田春海短冊は「5-2」にあり)

【補足2】千蔭が雅望の友だったという書き物 (en200776-p302563) 友／千蔭春海勇雄両岡勇雄ノ父／芙蓉浜臣文晁

8、村田春海



① 春海 和歌 短冊(手鑑「5-2」)

あひお／もふ

われもみつ人にもみえつはるの夢／あひおはすハかゝらましやハ

春海

【語注】

*人 ここでは相思相愛の相手。

*かからましやハ 「かくあらまし」(ことうであつただろう) +

「やハ」は反語。こうではなかっただろう。

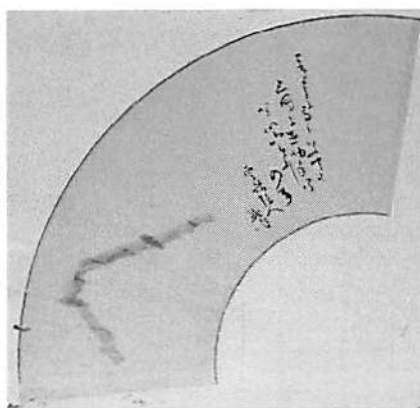
＊村田 春海（むらた はるみ、延享三年（1746）文化八年（1811）江戸時代中期から後期にかけての国学者・歌人。本姓は平氏。通称は平四郎。字は士観（さちまろ）。号は織錦斎（にしきりのや）・琴後翁（ことじりのおきな）。賀茂真淵門下で県居学派（県門）四天王のひとり。（wiki）

9、賀茂季鷹

①季鷹・長い詞書と狂歌 書

き物（手鑑1-282）

秋の野々千草も草は／常のこ
と筆になれるを／吾友小山梅千
丸は千世の／はしめの初春のあ
した／百くさのひな哥をしも／
よまれしはおのづからことし／
よりをちの百千歳の在／か如く
にこそハと春の／田のかへすか
へす秋の野の／鈴（？）にかもたちまさりて／めてた（？）くなん
おほゆれは／たゝ一言突き（？）ゝまゐらすとて



季鷹

百草の言葉のはなの／くるひ咲来るひと毎に／えみさかえつゝ

②季鷹 狂歌 扇面（手鑑2-31-2）

どのように高ういふても／三国に直切手の／ない山はふし／の峯

雲錦陳述人 戯作

【歌意】

どのように高くふっかけても三国（三国とは唐、天竺、日本をさすが）ここでは甲斐、駿河、相模の三国を指すか。）では誰も値切り手のいない山は富士山だ。

③季鷹 狂歌 短冊（手鑑4-163）

背面の官女の絵に

紫の周防かないし右近かや／此赤染の衛門付し者

季鷹

＊紫（式部）。周防（内侍）、右近（内侍）、赤染（衛門）はいずれも宮中で仕えた有名な女官。紫、周防に蘇芳（また紫の素袍もかけるか）、右近に鬱金、赤（染え門）と色づくし。秀逸。

④季鷹 狂歌 短冊（手鑑4-164）

大津絵に鬼の／念仏したるに

眼にみえぬ人の心そおそろしき／ころもを着ても鬼ハおに也

季鷹

【補助資料】

①五老 七月十八日付け書簡 季鷹江戸下着の事（手鑑2-31-1）

此節季鷹翁江戸へ下／着私方をも尋くれ卅余斗／にて対面仕候当年六十八才／と被申候へ共虚言にて実ハ／七十余の翁にて御され共大／丈夫にて吉原半籠（籬？）松葉や／よし春と申す粉類をもとめ／大ニもて候迎うれしがりをり候

②五老 一月廿日付け書簡 雅望と季鷹 狂歌の応酬（手鑑2-31-1）

末 鷹本年中出府少々／評判あしく有之候小子方へ／も来り候而二階二有之笠を／ほしきよし申候故遣し候／

日あたりにあたらぬやうに／めし給へ半夏過ての／たけのこのかさ

末鷹返し

やとりてハ一樹のかけも／わすれぬをまして六樹の／たけのこの笠
この外は雑読のミニ有之候／吉原へもなしミ通ひ候よし也

【語注】

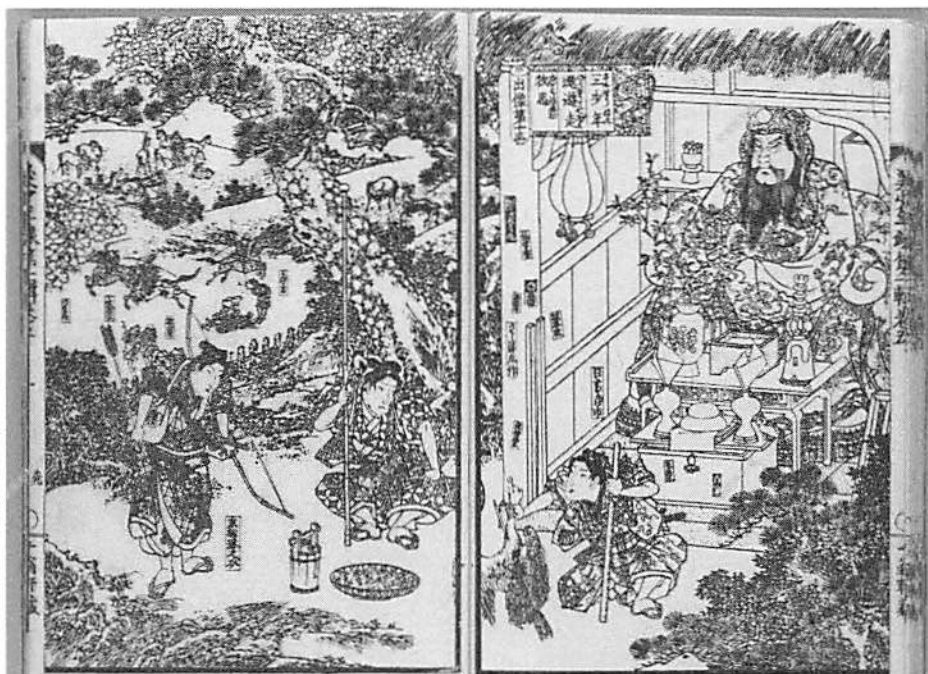
*賀茂季鷹（かものすえたか）

生没年・1751-1811（宝暦4-天保12）江戸後期の歌人。京都上賀茂神社祠官。本姓山本。安房守に任じ、雲錦亭と号した。若くして有栖川宮家に仕えたのち、江戸に20年間遊学し、加藤千蔭や村田春海らの江戸派歌人と交流を深め、雅名を高めた。歌はその最も得意とするところで、後年は小沢蘆庵なきあとの京都歌壇を香川景樹と二分するほど勢力があった。能書家として聞こえ、狂歌もよくした。

家集に《雲錦翁家集》、紀行文に《富士日記》があり、他に《伊勢物語傍注》等を著した。（コトバンク） 石川雅望の『雅言集覧』序文（源興詩・賀茂季鷹・遠藤春足・源剛）を叙している関係で付き合いがあったか？

【気づき】

②書簡は二月廿日付けとなつてゐるが「本年中」「日あたりにあたらずぬやうに」「半夏過ての」の語句と矛盾する。①書簡の日付け、七月十八日のこととすれば矛盾がない。同じ時期の季鷹江戸下向のことを言っているのではないだろうか。いずれにしても季鷹という人は神職にありながら狂歌もうまいし、年を偽って吉原通いもする愉快なじいさんだったようだ。



馬琴『近世説美少年録』から